

中級後期レベル (K800) の漢字・漢字語彙指導について

— Intermediate Kanji Book Vol.2を使用した授業の実践報告 —

平形 裕紀子

要 旨

本稿は筑波大学留学学習者センターで開講されている中級後期漢字クラス (K800) で、中上級日本語学習者向けに開発された『Intermediate Kanji Book』 vol.2を使用した授業の報告を行う。同教科書は中級以降、様々な学習活動を通して漢字語彙の拡充を目指すものである。授業においては特に新出漢字の導入時と練習の際に漢字の作る意味・用法のネットワーク構築を意識した漢字指導を行っている。しかしそのために要する時間が多くなり、様々な練習活動をする時間が少なくなってしまう問題も生じている。
【キーワード】 漢字・語彙教育 中上級日本語学習者

A Report on Kanji and Vocabulary Training for Semi-Intermediate Level Students using “Intermediate Kanji Book Vol.2”

HIRAKATA Yukiko

【Abstract】 This is a report on a semi-intensive kanji class at the International Student Center of Tsukuba University. We use the “Intermediate Kanji Book vol.2” in this class. This text aims to make vocabulary building more effective by using kanji in various activities. I report on how to manage semi-intermediate kanji classes, and how to use this kanji text effectively.

【Keywords】 kanji, vocabulary building using kanji, semi-intermediate kanji learners

1. はじめに ―使用教材の作成経緯

日本語学習において漢字は避けて通ることが難しい項目である。にもかかわらず漢字学習は日本語学習者、特に非漢字圏の学習者にとって特に難しい問題であるということは多くの研究者が言及し、また現場で教えている多くの教師も実感していることであろう。加納他(1989)は『Basic Kanji Book』(以下BKB) vol.1の冒頭で、初級の段階においての漢字の難しさについて以下の5つの項目を挙げている。

- (1) 字形の複雑さ
- (2) 数の多さ
- (3) 表意性・標語性
- (4) 日本語の表記システムの複合性
- (5) 多読性・多義性などの特性

これらは中級以降の学習者にとっても引き続き頭を悩ませる困難な点であるが、中級以降の学習者にとってこれらの点がどの程度克服されているか、あるいは困難さが継続しているかについて、加納(1994)は非漢字圏学習者では漢字や漢字熟語の意味理解はある程度できている場合が多いが、漢字の「書き」が弱いこと、また漢字圏の学習者は意味の理解は初級段階からできているが、漢字語の品詞や送り仮名の間違いが多い、字音語の読みなどに間違いが残る、という傾向を述べている。さらに、加納(同上)は非漢字圏・漢字圏ともに共通して形声文字の音符の知識が欠如していることを挙げている。

BKBシリーズの次のステップの教材として加納他(1993)は『Intermediate Kanji Book 漢字1000PLUS』(以下IKB) vol.1を著したが、その冒頭で上記のような問題を克服するための同書の学習方針を以下のように定めている。

- (1) 漢字学習は語彙学習である。
- (2) 漢字は読み書きだけ覚えても、文中の用法を知らなければ使えない。
- (3) 漢字は読解や作文など他の日本語能力と関連づけた形で学習する方がよい。
- (4) 漢字の字形や読み、漢字語彙の用法などを覚えたり整理したりするために有効と思われる知識や注意点などを学習項目として立てる。
- (5) 漢字の効率的な覚え方や練習方法は、学習者の文化圏、興味の対象、学習スタイルなどによって異なるので、学習者が自分に最適な方法を発見するのがよい。

しかしBKB vol.1、2およびIKB vol.1の3冊で学習漢字として提示されている漢字は合計740字であり、中上級レベルの日本語学習者に要求される1000字程度にはまだ足りなかった。

そこで、加納他(2001)は、中級後期から上級レベルの学習者に向けた『Intermediate Kanji Book 漢字1000PLUS』 vol.2を著した。同書の学習方針はBKBおよびIKB vol.1の学習方針を一貫して採用するものである。以下にその方針を挙げる。

- (1) 漢字語彙の拡充

- (2) 様々な練習活動の形式の提供
- (3) 他の活動と関連づけた総合的な学習
- (4) 漢字および漢字語彙の学習に役立つ情報の提示
- (5) 自立学習を促進する

一方、対象の学習者の日本語能力がIKB vol.1より高くなっていることから、IKB vol.1とは自ずと異なっている部分もある。まず、IKB vol.1では文中での用法を指導するために練習問題などで漢字語彙を含む文章を提示することが多かったが、それは1～2文程度の長さであった。IKB vol.2では最初の導入部分や課題部分に日本語の生教材あるいはそれに近いものを提示し、文章読解と併せて漢字語彙が学習できるようになっている。次に、IKB vol.1では学習項目によって各課が立てられていたが、IKB vol.2では各専門分野の基本的な漢字や漢字語彙を紹介するという立場から、各課は専門分野によって分けられている。また、各課が専門分野別になっているため、学習者の専門や興味に応じてどの課から始めてもよいよう設計されている。

本稿はこのような経緯で開発されたIKB vol.2を使用した筑波大学留学生センター技能別コースの中級後期漢字コース (K800) での授業報告を行い、中級から上級にかけての学習者への漢字・漢字語彙の指導方法について考察するものである。

2. K800クラスのレベル設定と対象となる学習者の背景

2.1 K800レベルの設定

筑波大学留学生センターでは初級から上級までの日本語学習者を対象にした9つのレベルで、様々な授業を行っている。初級の4レベル (100-400) の学習者に対しては「総合日本語」と「漢字」のコースを、中級以降の学習者に対しては「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」「漢字」の6つの技能別のクラスを提供している。

技能別「漢字」クラスでは上記BKBとIKBを使用し、そのレベル毎の使用状況は以下のようになっている。なお、100レベルでは、ひらがな、カタカナの学習が中心となるため、漢字クラスは存在しない。

K200 (初級前期)	BKB	vol.1	第1課～第11課
K300 (初級中期)	BKB	vol.1	第12課～第22課
K400 (初級後期)	BKB	vol.2	第23課～第35課
K500 (中級初期)	BKB	vol.2	第36課～第45課
K600 (中級前期)	IKB	vol.1	第1課～第5課
K700 (中級中期)	IKB	vol.1	第6課～第10課
K800 (中級後期)	IKB	vol.2	第1課～第3課
K900 (上級)	IKB	vol.2	第4課以降

K800レベルの内容は2010年度まではK900と統合された上級の漢字クラスで扱っていたものであるが、IKB vol.1を終了した学習者がIKB vol.2に進んだ際に、漢字の提示方法がそれまでと変わるためだけでなく、学期によってはかなり難解な文章や語彙から始まることになる場合があり、それまでの難易度との間に大きなギャップが生じる問題があった。このためどの課から始めてもよいように設計されているとはいえ、比較的語彙や文法の難度の低い第1課から第3課を独立して扱うK800が設置されることとなった。

このような理由から、K800では漢字学習の方法を、それまでの漢字あるいは漢字語彙単体の読み・書き・意味の記憶といった学習方法から、「漢字あるいは漢字語彙を文中で使用する練習を行う」という学習意識へと変化させるための示唆を与える指導も重要になっている。

2.2 対象学習者と現在のクラスの分布

2011年度春学期から2012年度秋学期までの5学期でK800を受講した人数と漢字圏・非漢字圏学習者の分布状況を表1に挙げる。なお、韓国人学習者については現在の韓国の漢字使用の現状から鑑みると漢字圏と呼ぶにはややためらわれるところがあるが、漢字を基にした語彙の発音がかなり似ていることなど漢字を全く持たない母語を持つ他の非漢字圏学習者と区別するために、今回は漢字圏に入れた。

表1 K800の受講人数と漢字圏・非漢字圏の比率 (2011～2012年度)

	受講人数	漢字圏学習者数 (%)	非漢字圏学習者数 (%)
2011年1学期	10人	6人 (60%)	4人 (40%)
2011年2学期	15人	14人 (93%)	1人 (7%)
2011年3学期	23人	17人 (74%)	6人 (26%)
2011年1学期	11人	2人 (18%)	9人 (82%)
2012年1学期	22人	12人 (55%)	10人 (45%)

震災による留学生数の減少があった年度が含まれるため、人数の増減が大きいですが、毎学期10人から20人前後の学習者が履修している。また、最近では、非漢字圏の履修者も増えている。

漢字学習において漢字圏と非漢字圏の学習者の間には、漢字そのものをすでに知っているか否か、あるいは日本語の漢字語彙と似た発音を持つ語彙を持っているか否かの背景の違いにより、漢字学習開始の時点ですでに差がある。両者の意識の違いについての示唆は清水 (1993および1994) などで行われている。それによれば、非漢字圏の学習者は漢字圏の学習者に比べ苦手意識を持ちやすいようである。しかし清水 (同上) は漢字の自主学習は可能であるとの自負を持つ非漢字圏学習者が存在していることも示唆している。

このように非漢字圏学習者が徐々に増えていく状況にあって、彼らに上記の調査で示唆されたような自主学習に対する自負、あるいは自信をどのように持たせていくか、この点を考えていく必要が大きくなってきていると思われる。

3. IKB vol.2の構成と授業での活動内容の概要

実際の授業の具体例をあげる前に、まず授業で使用するIKB vol.2の構成を見てみる。

教科書は図1のようなセクションに分かれており、その順で学習することが想定されている。

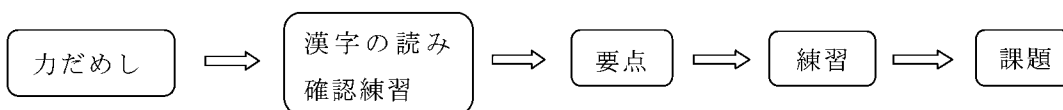


図1 IKB vol.2の学習の流れ

各セクションの内容と具体的な活動内容の概略を表2に示す。

表2 各セクションの内容と活動

セクション名	内容	K800での活動内容
力だめし	課のタイトルに挙げた専門分野に関する入門書や新聞記事などの内容を生のまま、あるいはそれを参考にして書き直したものを1～2ページ程度の分量の読み物として提示したもの。	一文ずつ（もしくは1段落ずつ）音読させ、その文中に含まれる新出漢字の導入を行いつつ、内容確認を行う。
漢字の読み確認練習	上記の力だめしに出てきた漢字語彙を取り出し、読み方の確認練習を行うもの。次ページにその漢字語彙の読み方を提示している。その際、BKBシリーズ、IKBシリーズのどの本に出てきた漢字かでグループに分け、学習者がどのレベルの漢字で躓いたか自分で判断できるようにしてある。	授業では使用せず、授業外の予習活動として、各自未習の漢字、既習であるが覚えていない漢字の読み方などを確認するために使用する。
要点	新しい漢字語彙を覚えるための情報や漢字を整理して記憶するのに有効な方法などを挙げている部分。	用法や語構成、漢字語の作り方など課ごとの内容に従って教師が説明を加える。
練習	その課で新出漢字として扱っている漢字とそれを使った漢字語彙、および要点で紹介した語彙を中心とした練習問題。読み・書き練習や形声音符の練習、漢字語彙の用法練習などを含む。	教室内で学習者に解答させる。用法練習の選択肢問題などでは、なぜその答えが正しいのか、他の語彙はどのように使うか等、正答だけにこだわらない練習も行う。
課題	練習をより発展させた内容の練習。力だめしに関連したものや力だめしの元になった生の素材を提示し、それについての読解問題加えたものや、そこで解説されている方法を使って自分で何かを作成するなどの活動を含む。	授業内では使用しない。この課題に読み練習、書き練習、漢字語を使った作文練習などを加えたものを宿題として与える。

4. 指導の際の留意点

ここでは、上記の教室内活動のうち、「力だめし」のセクションと「練習」のセクションを扱う際に、どのような点に留意し、どのような指導を行うことができるか、K800の授業の実践例を挙げながら検討する。

中級以上のレベルの漢字教育が重要である点について、林(2011)は「初級から中級に行くにしたがって漢語は増加する傾向にあるため、中級以降の語彙能力は漢字の学習にかかっていると言っても過言ではない」と述べている。

語彙能力を上げていくために漢字学習が必要であるならば、では、漢字語彙指導とはいかにあるべきか。加納(2000)では中上級レベルの漢字語彙指導の方法について漢字語が作るネットワークに注目させることの必要性を説いている。加納は(同上)では、ある漢字語が作るネットワークには単に漢字そのものの字形・表す音・意味だけでなく、その漢字の品詞性や文法的・意味的共起性、文体的特徴などがあると述べている。

漢字導入や練習ではこの点に学習者の注意を向けさせるような指導を心がける必要があらう。

4.1 力だめし：新出漢字の導入と漢字語彙指導

導入の際に気をつけることとして、まずこのレベルの学習者になると、新出漢字と言ってもその中でもかなりの割合の漢字は別の技能別コースで目にしていたり、日本での生活や研究活動の中で目にしたりしたことのある漢字であり、音読みか訓読み、もしくはその両方を知っている学習者も多いことが挙げられる。しかし、非漢字圏の学習者の場合、ある漢字を漢字語彙の一部としては知っていても、その漢字を使用した他の語彙や音読みか訓読みのどちらかは知らないといった偏った知識になっている場合がある。また、漢字圏の学習者の場合も意味は即座に理解できても読み方が間違っていたり、自国での用法と日本語での用法が異なることに気がつかなかったりする場合がある。

上記のような理由で、初級と異なり一つのクラスの中で学習者の漢字についての知識量の幅が大きくなっている。そこで、現行のK800の授業では、すべての情報を教師から与えるのではなく、まず学習者に読み方やその漢字を使った語彙を発言させ、クラス内全体の共通認識を作り、そのうえで、不足している知識を教師が補うという形で導入を進めている。

その際、先に述べたように漢字のネットワークを作るための導入方を考える必要がある。導入の例として、第1課で紹介される漢字「介」の導入方法を挙げる。

1. 「力だめし」の文を音読させる：音読させることによって音声での読みの確認をさせる。
2. 漢字の書き方の導入：漢字の書き方は中上級であっても非漢字圏の学習者の弱点であ

る場合が多い。個々に書かせて練習することはないが、教師がその場で板書することによって筆順や書く際に注意する点を示す。

3. 読みの確認：読みに関しては「紹介」の「カイ」という音読みは既にほとんどの学習者が知っているため特に言及しないが、人名読みとして「すけ」を知っている学習者が発言した場合は、それを板書してその読みがどのように使われるか補足説明する。さらに、この漢字が音符として使われているかどうか、他の漢字で共通の部分があるかどうかを考えさせる。「介」の場合、「界」が似た形を持ち、同じ音を持つことに気付かせる。
4. 漢字語彙の導入（学習者主導）：まず、この漢字を使った他のどんな言葉を知っているか学習者に発言させる。発言するのは主に漢字圏の学習者であるが、中級程度の語彙であれば非漢字圏の学習者も発言してくることも多い。この時学習者に板書させるのではなく、口頭で行わせる。これは時間の短縮のためであると同時に、発言した漢字の言葉を教師や他の学習者がすぐに理解できるかどうかで、自分の覚えている読み方が日本語として正しいかどうかを学習者自身が確認することができるためである。「介」の場合、学習者から出やすいのは「紹介」「介護」「介入」などである。
5. 漢字語彙の導入（教師主導）：学習者からの発言が途絶えたところで、それ以外でよくつかわれる漢字語を教師の方から導入する。（「仲介」「介抱」「介助」など）学習者からの発言が多い場合には適当なところで切り上げさせ、特殊な読み方などがある場合のみ、教師が補足する。
6. 漢字の意味の類推：4、5の活動で出てきた漢字語彙の意味からその漢字の意味を類推させる。類推が難しい場合には教師側から提示する。この場合、「紹介」や「仲介」の意味から人と人との間を仲立ちする、という意味を類推させることになる。
7. 用法の導入：次にそれぞれの語彙の用法を説明する。「介」の場合、「する」動詞として使う語彙が多いため、共起する助詞を紹介し、短文を作らせるなどの活動を行う。
8. 類義語の区別：最後にその漢字を使った類義語が存在する場合はその使い分けを説明する。「介」であれば「介護」と「介助」と「介抱」の違い、「仲介」「介入」の違い、など。

このような形で一つの漢字が持つ広い意味・用法・表音のネットワークを紹介していく。

4.2 練習：漢字語彙の用法練習と類義語の区別のための練習

「練習」のセクションは教科書に載せられた練習問題を解いていく部分であるが、この練習も単に答えを出すだけではなく、そこからさらに発展させた練習を行い、語彙のネッ

トワークを広げるような指導が可能である。

たとえば、第1課の練習2は次のような問題になっている。

【練習2】 次のことばの対語は何でしょうか。その読みも書きなさい。

1. 陽気な ⇔ ()

この練習では、まず漢字が提示されている「陽気」の読み方を確認し、さらにその対語となる「陰気」を書く活動を行う。しかしこれにとどまらず、この二つの品詞を確認し、さらにどのような性格の人に使うか、その例文を作ってみるという練習につなげていくこともできる。

用法練習の例として、同じ第1課の練習5の問題1を見てみる。

【練習5】 次の漢字熟語の中から最も適切な語を選び、読みを書きなさい。

1. あの人は他人の意見を_____するばかりで、自分の意見を出さない。

{評価 評判 評論 批評}

この問題では下線の後ろにある「する」の存在と文章の前半部分の「他人の意見を～ばかり」という部分から「動詞」として使え、かつ否定的な意見を述べるという意味をもつ「批評」を選択することになる。この練習も、正しい選択をして次に移るのではなく、同じく動詞として使える「評価」が使えないのはなぜか、「評判」や「評論」はどのように使うのか、と発展させることができる。

5. 宿題：自主学習に向けて

宿題では先に示したように読解練習や読み・書き練習の他に、読解で読んだ文章をもとにある程度の長さを持った文章を作ったり、新出漢字を使った語彙を自分で選択し、それを使った短文を作ったりする練習がある。以下にその例を挙げる。

第1 課宿題

1-4 あなたの国の有名な人物の性格を描写する文を書いてください。

1 課の要点に出てきた漢字の表現をできるだけたくさん使ってみましょう。

4. 次の漢字を辞書で調べて、もっともよく使われると思う熟語を選び、例のように文を作りなさい。

例) 己 → 自己 : 子どもというのは自己中心的なものだが、集団の中で協調性を学んでいく。

1 否 → _____ :

このような問題では、多くの学習者が教科書に載っている熟語や授業で紹介された熟語だけでなく、自分で調べた語彙を使って文章を作ってくる。与えられたものだけでなく、学習者が積極的に漢字学習に向かっている姿勢の表れであろう。

その反面、授業前の予習にはかなり消極的であり、新出漢字などはほとんど調べない状態で授業に参加している学習者が多い。本来、「力だめし」の導入で挙げた活動のうち1から6まではある程度予習として自主学習をしてもらうことが望ましいのであるが、このような状態のため、授業がやむを得ず復習型になっている。これは学習者の自律学習に対する不安感が消えないことに由来するのであろう。

宿題で見せる積極性を予習型でも発揮させるのはどうすればいいのか、これは今後の課題として考えるべき問題である。

6. 今後の課題

上記のような問題も含め、現在の授業運営の問題点を2つ最後に挙げておく。

(1) 導入にかかる時間の短縮：

5. で述べたように授業が復習型になっているため、どうしても新出漢字とそれを使用した漢字語彙の導入にかなりの時間がかかる状態になっている。特に、用法の導入については、このような詳しい説明の入った辞書がまだまだ少ない現状では授業に頼らざるを得ない。学期中に行う簡易アンケートでも、「非常に役に立つ情報ではあるが、そのために練習の時間が少なくなるのがもったいないと思う」といった類の意見が寄せられる。学習者の自主学習への不安を和らげ、予習であっても自分で学習する自信をつけさせるためにはどうしたらいいか、そのための学習方法や資料などをどのように提供していくか、考える必要がある。

(2) より効果的な用法練習の模索：

教科書中で行う選択肢問題や自分でその語彙を使って作文を行う練習は用法練習として効果的ではあるが、依然として授業で使用法を間違えた語彙について、クイズやテストで同じ間違いを繰り返す傾向がある。このような混同をなくすための効果的な練習方法を考えていく必要がある。

謝辞

本報告で用いたIKB Vol.2の宿題はK900で同じ教科書を使用している加納千恵子氏の尽力によるところが大きい。K800での授業外活動にも非常に有効なものであり、ここに深い感謝の意を表する。

参考文献

- 加納千恵子 (1994) 「中級漢字教材の開発－『漢字1000PLUS』の指導法」『第3回 小出記念日本語教育研究会 論文集』小出記念日本語教育研究会：65-72
- 加納千恵子 (1994) 「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学者センター 日本語教育論集』第9号 筑波大学留学者センター：41-50
- 加納千恵子 (2000) 「中級漢字学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学者センター 日本語教育論集』第15号：35-46
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 (1989) 『基礎漢字500 Basic Kanji Book』vol.1 凡人社
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 (1989) 『基礎漢字500 Basic Kanji Book』vol.2 凡人社
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智 (1993) 『Intermediate Kanji Book 漢字1000PLUS』vol.1 凡人社
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智・平形裕紀子 (2001) 『Intermediate Kanji Book 漢字1000PLUS』vol.2 凡人社
- 清水百合 (1994) 「漢字学習のあり方に対する学習者の問題意識調査(1)」『筑波大学留学者センター 日本語教育論集』筑波大学留学生センター：51-60
- 清水百合 (1995) 「漢字学習のあり方に対する学習者の問題意識調査(2)」『筑波大学留学者センター 日本語教育論集』筑波大学留学生センター：29-40
- 林奈美 (2011) 「日本語教育における中級学習者向け漢字教材の分析」『東京外国語大学 日本教育研究年報15』東京外国語大学：97-109